

國學院大學學術情報リポジトリ

『「保健体育科目指導法」に関する科目』への模擬授業導入による効果

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川田, 裕樹, 伊藤, 英之, 村上, 佳司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002107

『保健体育科目指導法』に関する科目』への 模擬授業導入による効果

川田 裕樹・伊藤 英之・村上 佳司

【要 旨】

本研究はFD活動の一環として「保健体育科目指導法」に関する科目において模擬授業を導入した授業の効果を検証する目的で、模擬授業を行った年度の学生と、模擬授業を行わなかった年度の学生の双方に対し、「大学の授業で十分指導されていたことおよび、もっと指導しておいてほしかったと思うこと」についてのアンケート調査（自由記述）を教育実習実施後に行った。調査結果をKJ法にて分類した結果、模擬授業導入前の学生が「指導不十分だった点」と回答したのが最も多かったのは、「授業に関する指導」であった。一方、模擬授業導入後では、学生が「指導十分だった点」と回答したのが最も多かったのは「生徒の管理方法・テクニック」であったのに対し、「指導不十分だった点」として最も多くの学生が挙げたのは「授業の中身・内容」についてであった。以上の結果より、模擬授業を実施したことによる一定の効果は認められたものの、授業の構想力や省察力、授業研究・教材研究の能力などを養うには至らなかったことが推察された。いくつかの先行研究では、模擬授業によって授業への省察力や授業計画力が養成されたことが報告されていることから、これらの能力を養成するために、いかにして「学生の思考を深めること」ができるか、学生の学びの実態と照らし合わせつつ他教科とも連携しながらカリキュラムや授業内容を更に検討し続けていくことが重要だと考えられた。

【キーワード】

模擬授業 FD活動 教員養成 学生の要望 省察力

I. はじめに

平成18年7月に示された中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」にて、大学における教職課程に「教職実践演習」が必修科目として加わった。教職実践演習の位置付けや設置主旨は、『教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、

自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される』と述べられている⁽¹⁾。このことより、教職課程をより一層厳格なものとし、即戦力の教員の養成が望まれていることが推察される。

教職課程の多くの科目の中で、先に挙げた教職実践演習の目的を達成するためのポイントとなるものが教育実習ではないかと思われる。教育実習は、それまでの教職課程科目やその他の関連科目で培った知識を基に教育現場にて実習を行い、自身の教員としての能力の現状を確認するためのものである。学生にとって教育実習が自身の能力を試す場になるためには、教育実習前に

履修する科目において多くの知識を獲得するとともに、教育観や思考力、問題解決能力などの諸能力を形成し、ある程度の専門的力量を身につけておくことが必要となる。

一方、國學院大學人間開発学部（以下、本学部と示す）では、大学教員のFD（Faculty Development）活動の一環として、現職の中学・高等学校教員や学生を対象とした様々な調査を子ども支援学科、初等教育学科、健康体育学科の3学科それぞれで実施するとともに⁽²⁾、それらによって得られた知見を授業内容やカリキュラムに反映させる試みを行っている。今回、國學院大學人間開発学部健康体育学科（以下、本学科と示す）では、教育実習に向かう学生がより充実し、学び多き教育実習を行うためのカリキュラムおよび教育内容改善のための基礎資料を得るために、平成26年度に教育実習を終えた学生を対象に、本学部における教員養成にあたっての満足度、すなわち、「大学の授業で十分指導されていたこと」および「もっと指導しておいてほしかったと思うこと」について調査を行った。そして、その調査結果をもとに本学科の教員で改善策を検討し、指導案作成のための指導をより重点的にすすめるとともに、学生が教師役と生徒役になって授業を進める、いわゆる「模擬授業」形式の授業をより多く導入するように改変した。そこで本研究では、今回の改変による効果、その中でもとりわけ模擬授業を導入したことによる効果を検証することを目的に、模擬授業導入前の平成26年度に教育実習を終えた学生と、導入後の平成27年度に教育実習を終えた学生に対するアンケート調査の内

容にどのような違いがみられるかを比較するとともに、中学・高等学校の教員養成のために今後どのような教育内容やカリキュラムの改善が必要なのかを検討することとした。

Ⅱ. 方法

A. 研究のデザインと概要

國學院大學で中学・高等学校教員免許状（保健体育）取得にあたって定められている教育実習に関する科目と保健体育科目指導法に関する科目の、履修のおおまかな流れは次のとおりである。まず「教育実習ⅠA（事前指導）」「体育科教育法Ⅰ」「保健科教育法Ⅰ」「体育科教育法Ⅱ」「保健科教育法Ⅱ」を履修し、その後、中学・高等学校での「教育実習Ⅱ（参観実習）（中・高）」「教育実習Ⅲ（教壇実習）（中・高）」（以下、教育実習とする）に挑み、そして「教育実習ⅠB（事後指導）」を履修することとなっている。今回、平成26年度に教育実習を終え、「教育実習ⅠB（事後指導）」を受講した学生に対し、教育実習において体育授業を担当するにあたり、大学の授業で十分指導されていたことおよび、もっと指導しておいてほしかったと思うことを調査する目的で、後に述べるアンケート調査を実施した。アンケートを回収後、その結果を踏まえてFD活動の一環として調査結果について本学部および本学科内で議論し、カリキュラムや授業内容の改善を図った。そして翌年、平成27年度に教育実習を終え、「教育実習事後指導（ⅠB）」を受講した学生に対して同様のアンケート調査を実施し、カリキュラムや授業内容の改善を図る前の

平成26年度調査（以下、H26調査）と、カリキュラムや授業内容の改善を図った後の平成27年度調査（以下、H27調査）とで、学生の回答にどのような違いがみられるかを分析した。

B. 調査の実施・分析方法

対象は、平成26年度に「教育実習1B（事後指導）」を受講した健康体育学科4年生、45名および、平成27年度に「教育実習1B（事後指導）」を受講した健康体育学科4年生、41名であった（以下、対象学生とする）。対象学生に対し『教育実習で体育の授業をするにあたって、大学の授業で十分指導されて実習にいきいた点は？』および『教育実習で体育の授業をするにあたって、大学の授業でもっと指導してほしい内容とは？』という2つの設問について、アンケート用紙にて自由記述で記載させた。

その後、H26調査とH27調査それぞれのアンケートに記載されていた内容について、『教育実習で体育の授業をするにあたって、大学の授業で十分指導されて実習にいきいた点は？』は「指導十分だった点」として、『教育実習で体育の授業をするにあたって、大学の授業でもっと指導してほしい内容は？』は「指導不十分だった点」として文章で抽出し、それを内容整理（KJ法⁽³⁾）によるグループ分けとタイトル付け）した。さらに、内容整理することによって分類できた項目（グループ）について、①H26調査およびH27調査それぞれにおいて抽出された「指導十分だった点」と「指導不十分だった点」を比較するとともに、②H26調査とH27調査で、「指導十分だった点」と「指導不十分だった点」がどのように変化した

かについて分析を行った。

Ⅲ. 結果および考察

A-1. H26調査の結果

大学の授業で十分指導されていたと思うこと、および、もっと指導してほしいかと思ったことについての結果を表1に示す。

表1 平成26年度調査（模擬授業導入前）における学生の「指導十分だった点」および「指導不十分だった点」

指導十分だった点 31(100)	指導不十分だった点 61(100)
1. 指導案作成の指導 12(38.7)	1. 授業に関する指導 18(29.5)
2. 授業に関する指導 9(29.0)	2. 指導案作成の指導 15(24.6)
3. 模擬授業での経験 4(12.9)	3. 模擬授業の回数 11(18.0)
4. 実技系授業 3(9.7)	4. 授業構成の指導 6(9.8)
4. 教育実習1A（事前指導） 3(9.7)	5. 自身の運動技能向上のための指導 5(8.2)
	6. 学科のカリキュラム 3(4.9)
	6. 教材研究の方法 3(4.9)
n=45	個数(%)

大学の授業で十分指導されていたと思うこととして、対象学生が「指導十分だった点」と挙げた項目は合計31項目であった。最も多かった項目は、「指導案作成の指導」に関する内容で、指導案を作成できたことや、指導案の書き方を学べたことなど、計12個抽出された。次に多かった項目は「授業に関する指導」についての内容で、挨拶や出欠の取り方を学べたことや、集合のさせ方についてなど、計9個抽出された。3番目に多かった項目は「模擬授業での経験」に関する内容で、模擬授業を行えたことや、模擬授業を経験したおかげでイメージをつかめるようになったことなど、計4個抽出された。4番目は「実技系授業」についての内容、および「教育実習1A（事前指導）」についての内容で、ど

ちらも計3個ずつ抽出された。「実技系授業」についての内容では、様々なスポーツを履修できたことで授業に幅を持たせることかできたこと、「教育実習1A（事前指導）」についての内容では、教育実習1Aでの実践的指導が現場で役立ったことなどが挙げられていた。

次に、対象学生が「指導不十分だった点」として挙げた項目は合計61項目であった。その中で最も多かった項目は「授業に関する指導」についての内容で、もっと多くの実技指導法を学びたかったことや、指示の仕方、声の掛け方についてなど、計18個抽出された。次に多かったのは「指導案作成の指導」に関する内容で、もっと詳しい指導案の指導をしてもらいたかったことや、指導案を作成する練習をしたかったことなど、計15個抽出された。3番目に多かった項目は「模擬授業の回数」についての内容で、模擬授業の機会を全員に与えてほしいといったことや、模擬授業の回数を増加してほしいといったことなど、計11個抽出された。4番目は「授業構成の指導」に関する内容で、授業の組み立て方や授業構成の仕方など、計6個抽出された。以下、5番目は「自身の運動技能向上のための指導」に関する内容で、スポーツ実技の授業において技術的な面をもっと指導してほしいといったことや、もっと専門性が高まるような実技指導をしてほしいといったことなど、計5個抽出された。6番目は「学科の授業カリキュラム」に関する内容および「教材研究の方法」に関する内容で、「学科の授業カリキュラム」に関する内容では、本学科で開講されていないスポーツ種目について開講してほしいといったこと、また、

「教材研究の方法」に関する内容では、教材研究の仕方に関する内容など、どちらも計3個抽出された。

A-2. H26調査の考察および授業内容の改変

「指導案作成の指導」については、指導十分だったとの回答が12個抽出されたものの、指導不十分との回答も11個認められた。また、「授業に関する指導」については、指導十分だったとの回答が9個だったのに対し、指導不十分だったとの回答が6個、さらに、「授業に関する指導」については指導十分だったとの回答が9個だったのに対し、指導不十分との回答が18個にもなったことから、これらについての授業改善が急務であると考えられた。

そこで、これらへの対応として、「教育実習1A（事前指導）」および、「体育科教育法Ⅱ」「保健科教育法Ⅱ」（以下、教科教育法Ⅱとする）にて、受講生全員が指導案作成および模擬授業を行うよう改変した。具体的には、「教育実習1A（事前指導）」において、特に『導入』を意識させた模擬授業（一人当たり5～10分程度）を実施させた。また、「教科教育法Ⅱ」では、『導入～展開～まとめ』の流れを意識させた模擬授業（一人あたり15～20分程度）を実施させた。

B-1. H27調査の結果

大学の授業で十分指導されていたと思うこと、および、もっと指導しておいてほしかったと思うことについての結果を表2に示す。「大学の授業で十分指導されていたと思うこと」として、学生から「指導十分

表2 平成27年度調査（模擬授業導入後）における学生の「指導十分だった点」および「指導不十分だった点」

指導十分だった点 52(100)	指導不十分だった点 47(100)
1. 生徒の管理方法・テクニック 21(40.4)	1. 授業の内容・中身 15(31.9)
2. 模擬授業 12(23.1)	2. 生徒の管理方法・テクニック 11(23.4)
3. 指導案作成 8(15.4)	3. 指導案作成 10(21.3)
4. 授業の内容・中身 4(7.7)	4. 模擬授業 5(10.6)
4. 教師の服装・態度 4(7.7)	5. 用具の使い方・準備 3(6.4)
6. 用具の使い方・準備 3(5.8)	6. 学科の授業カリキュラム 1(2.1)
n=41	個数(%)

だった点」として挙げられた項目は合計52項目であった。最も多かった項目は、「生徒の管理方法・テクニック」に関する内容で、整列させる時の掛け声や、私語や列の乱れなどの注意の仕方、笛の使い方など、計21個抽出された。次に多かった項目は「模擬授業」に関する内容で、模擬授業を複数回行えたことや、それによって授業の流れをつかめるようになったことなど、計12個抽出された。3番目に多かった項目は「指導案作成」についての内容で、細かな指導案の書き方を理解できるようになったことや、指導案の工夫の仕方など、計8個抽出された。4番目は「授業の中身・内容」に関する内容、および「教師の服装・態度」に関する内容で、どちらも計4個ずつ抽出された。「授業の中身・内容」に関する内容では、スポーツ実技の授業などで様々な種目をおこなうことができたことなど、また、「教師の服装・態度」に関する内容では、教育実習生としての礼儀、服装、態度、心構えなどが挙げられていた。そして6番目は「用具の使い方・準備」についての内容で、用具の準備や確認の仕方を学べたことなど、計3個抽出された。

次に、学生から「指導不十分だった点」

として挙げられた項目は合計47項目であった。その中で最も多かった項目は「授業の内容・中身」に関する内容で、種目ごとの特性や、各学年の特徴について、あるいは授業構成の仕方など、計15個抽出された。次に多かったのが「生徒の管理方法・テクニック」についての内容で、生徒の目線の集め方や、授業内の話し方、授業を展開する時のコツ、笛の吹き方、準備運動の仕方など、計11個抽出された。3番目に多かった項目は「指導案作成」についての内容で、指導案の具体的な書き方全般についてや、指導案の細部の書き方についてなど、計10個抽出された。4番目は「模擬授業」に関する内容で、もっと模擬授業の時間を長くして欲しいといったことや、模擬授業の回数を増やして欲しいといったことなど、計5個抽出された。以下、5番目は「用具の使い方・準備」に関する内容で、グラウンドでのトラックの作り方やラインカーでの線の引き方に関する事など、計3個抽出された。6番目は「学科の授業カリキュラム」に関する内容で、本学で開講されていないスポーツ種目について開講してほしいといったことが1個抽出された。

B-2. H27調査の考察

「模擬授業」に関する内容は、指導不十分との回答が5個みられたものの、指導十分だったとの回答は12個にのぼり、2倍以上の高い出現率であった。また、「生徒の管理方法・テクニック」に関する項目でも、指導不十分との回答が11個であったのに対し、指導十分だったとの回答が21個にものぼったことから、「教育実習1A（事前指導）」および、「教科教育法Ⅱ」にて受講生

全員に模擬授業を行わせたこと、また、模擬授業の中で生徒の管理方法や、笛の使い方、号令の掛け方などを指導したことが効果としてあらわれたものと考えられた。一方で「指導案作成の指導」については、指導十分との回答が8個みられたものの、指導不十分との回答も10個あり、「教育実習1A（事前指導）」や「教科教育法Ⅱ」にて指導案作成の指導を増やすようにしたものの、指導案作成に関してさらに指導してもらいたいという要望があることがうかがえた。さらに、「授業の内容・中身」については、指導十分との回答が4個であるのに対し、指導不十分との回答が15個にもものぼったことから、模擬授業の回数を増やしたことによって「模擬授業」そのものの経験や、「生徒の管理方法・テクニック」に関してはその効果が認められたものの、実際の「授業の内容・中身」に対してまでの効果には至らなかったことが推察された。

C. H26調査とH27調査の結果の比較と考察

H26調査において学生が「指導不十分だった点」と回答したものが多かったのは、1番目が「授業に関する指導」、2番目が「指導案作成の指導」、3番目が「模擬授業の回数」であった。一方、H27調査において、学生が「指導十分だった点」として回答したのは、1番目が「生徒の管理方法・テクニック」、2番目が「模擬授業」、3番目が「指導案作成の指導」であった。これらの結果より、H26調査とH27調査とでは研究対象となった学生が異なるため一概にいけない部分もあるものの、H26調査において抽出された「指導案作成の指導」「模擬授

業の回数」といった指導不十分な点が、教育実習1A（事前指導）や教科教育法Ⅱにおいて模擬授業や指導案作成を重視した内容に改めたことで、H27調査では「模擬授業」「指導案作成の指導」が指導十分な点として挙げられるに至ったと推察された。また、H26調査において指導不十分な点として挙げられた「授業に関する指導」についても、H27調査では「生徒の管理方法・テクニック」が指導十分な点として挙げられたことから、「教育実習1A（事前指導）」や「教科教育法Ⅱ」において指導案や模擬授業を重視したことについては、一定の効果があつたものと思われた。

一方、H27調査においても「指導不十分だった点」として挙げられたのは、1番目が「授業の中身・内容」、2番目が「生徒の管理・テクニック」、3番目が「指導案作成」であった。このうち、「生徒の管理・テクニック」および「指導案作成」については、H27調査において「指導十分だった点」との回答もほぼ同数であったことから、「教育実習1A（事前指導）」や「教科教育法Ⅱ」における模擬授業や指導案に関する授業改変について、有効であるものの、いくら行えどもさらにたくさん指導してもらいたいと感じている学生も一定数存在していることが示唆された。次に、H27調査の「指導不十分だった点」において最も多かった「授業の中身・内容」について考えてみたい。この項目は「指導十分だった点」における回答者が4名のみであったことから、指導不十分と感じている者が多かったことが推察され、さらに、H26調査において「指導不十分だった点」との回答が最も多かったのが「授業に関する指導」であつ

たこと、また、H27調査において「指導十分だった点」での第1位が「生徒の管理方法・テクニック」であったことを考え合わせると、「教育実習ⅠA（事前指導）」や「教科教育法Ⅱ」において模擬授業を重視し、学生に模擬授業を行う機会を多く与えたことが、教育実習において教壇に立つといった「場慣れ」や「号令の掛け方」「集合のさせ方」など、「生徒の管理方法・テクニック」においては有効であったものの、「授業の中身・内容」、すなわち、授業の構想力や省察力、授業研究・教材研究の能力を養うには至らなかったものと考えられた。

IV. 総合考察

教員養成に関わる授業において「模擬授業」は多くの大学で導入されており、小学校や中学・高等学校の体育、あるいは保健に関わる教科教育において、その効果が多数報告されている⁽⁴⁻¹²⁾。一方、大学における教員養成系科目の模擬授業を充実させることによる変化について、教育実習を終えた後の学生を対象に模擬授業を実施しなかった場合と比較し、教員養成にあたっての満足度の視点から検討した報告は見られない。今回、我々はFD活動の一環として行った、カリキュラムおよび教育内容改変による効果、特に模擬授業を導入したことによる効果を検証することを目的に教育実習後の学生を対象に、模擬授業や指導案作成を重点的に組み込まなかった学年と組み込んだ学年とで学生が感じる「指導十分だった点」や「指導不十分だった点」に違いが見られるかを検証し、授業内容改変の効果検証を試みた。

大学の教員養成に関わる科目における模擬授業の効果について検証したいくつかの先行研究^(9,10)によると、模擬授業を実施することで学生が「省察」する能力が高まったとの報告が複数みられる。藤田ら⁽⁹⁾は、「体育授業理論・実習Ⅱ」の授業の中で全6回の模擬授業を実施し、模擬授業についての振り返りのために、課題としてリフレクションシートを記入させている。このリフレクションシートは「授業展開」「教師行動」「教材・学習課題」「教具」の4項目について、それぞれ「事実」欄、「評価」欄、「理由・原因」欄、「発展・改善案」欄を各列に設け、「省察」を促すというものである。このリフレクションシートを、模擬授業における教師役経験前後で比較したところ、教師役を経験することによって「教師行動」から「教材・教具・学習課題」へ、授業を「省察」する視点の転換が見られたことを報告している。一方、宮尾ら⁽¹²⁾は「学校スポーツ専門実習Ⅰ」において、模擬授業や授業後のリフレクション、リフレクションシートの記入などを行う授業を実施し、この科目を受講する前（2014年1月）と受講後（2014年7月）とで質問紙（自由記述）にて「授業・授業づくりにおいて大切だと考えていること」を回答させた。そして、その内容を①授業計画、②授業実施、③省察、④授業改善、の4カテゴリーに分類したところ、③「省察」や④「授業改善」に関する記述は模擬授業前後ともほとんどみられなかったものの、模擬授業前には②「授業実施」に関する記述（「メリハリ大事」といった教師の指導力・指導計画などに関する内容）が最も多かったのに対し、模擬授業後は①「授業計画」に関する記述（「目標と

内容を明確にする」といった授業目標との対応などに関する内容)が最も多くなったことを報告している。また、宮坂ら⁽¹¹⁾は、保健体育教員免許に関する授業「保健体育科教育法B」において保健の模擬授業の時間を3回取り、学生の授業観察における視点の変化を検討したところ、授業観察を通して学生が振り返る視点は、初期段階では先生の振る舞いや板書といった「教授行為」すなわち「(実際に)見える部分」が中心であったものが、授業参観を重ねることで「授業の目標と学習成果」や「授業計画・運営」といった「見えづらい部分」への気づきが振り返りの視点として形成されていくこと、また、「教授行為」そのものに関する記述においても、「単なる教師の振る舞い」から「その教師がいかに生徒の学習と関連しているかを合わせて考え、教授行為の意図や効果を振り返る視点」が形成されていく傾向にあったことを報告している。今回の我々の報告では模擬授業を通してどのような能力が高まったのかは調査していないので明らかではないが、H26調査からH27調査にかけて模擬授業を重視した授業内容に改めてもなお、「授業の中身・内容」が指導不十分だと多くの学生が感じていることを踏まえると、藤田ら⁽⁹⁾が模擬授業で身についたとする「省察」する能力や、宮尾ら⁽¹²⁾が模擬授業で身についたとする「授業計画」に関する能力などをいかにして育成するか、検討する必要があるだろう。藤田らや宮尾らが実施している授業内容に共通するのはリフレクション(およびリフレクションシートの記入)ということを見ると、本学の学生が「授業の中身・内容」が指導十分と感じるような授業

を展開していくには、リフレクションさせるための時間の確保や、リフレクションのさせ方、あるいはリフレクションシートの内容の工夫などが有効なのかもしれない。また、教育実習を経験する前の模擬授業と教育実習経験後の模擬授業とでの学生の着目点の違いについての調査⁽⁵⁾によると、教育実習を経験する前の模擬授業では、授業の進め方や子どもへの対応の仕方など授業運営(マネジメント)に焦点が当てられていたのに対して、教育実習を経験した後では、指導した内容についての具体的な反省点や改善のためのポイントが、授業運営、教育内容、教材、学習者のレディネスなどにかかわって述べられるとともに、「良い授業をするためには今の自分に何か足りないか」「自分は何を学ぶべきか」といった「学修の必要性」にまで評価の視点が広がったことが報告されていることから、模擬授業をいつ、どのタイミングで実施するのが適切なのかも検討が必要であろう。

近年、大学教育においてもアクティブ・ラーニングが導入されるようになり、初年次教育や一般教養系、教員養成課程など様々な科目で、また、手法はワークシート、クリッカーを用いたもの、反転授業、協同学習、ディベートなど、さらに、人数も受講者が10名程度の少人数のものから200名の大人数を対象としたものまで、多種多様な対象、内容、形式のアクティブ・ラーニングが行われている⁽¹³⁻¹⁷⁾。アクティブ・ラーニングの定義が『教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学ぶことによって、後で学んだ情報を思い出しやすい、

あるいは異なる文脈でもその情報を使いこなしやすいという理由から用いられる。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等を行うことでも取り入れられる』である⁽¹⁸⁾とするならば、大学において学生に教師役と生徒役を担わせて模擬授業をすすめる形式の授業はまさに「アクティブラーニング」といえる。一方で、アクティブラーニングは体育学習においても大学教育においても、学習者側の学びや思考の点(学習論)から考慮すべきことや問題点などについて、数多くの指摘がされている^(16,19-21)。河野⁽¹⁹⁾は、アクティブラーニングを用いることの意義や教育目標の観点から十分吟味することなく、学習者が話し合っている様子や座学に比すれば圧倒的に活発に動き回る様子を学習者の光景として外側から見ていることに満足し、それを「主体的」とみなすアクティブラーニングへの不十分な理解による授業設計と評価の視点を問題点として挙げている。そして、溝上のアクティブラーニングの定義⁽²²⁾にある「認知プロセスの外化」の点から、教員養成のカリキュラムにおいてはアクティブラーニングを自身の活動プロセスの記述などだけにとどめるのではなく、授業デザインにまで転換していくことを求めることが必要であると述べている。また、岡野⁽²⁰⁾は、アクティブラーニングに関連する中央教育審議会答申や文部科学大臣による諮問において散見される「主体的」「能動的」「協働的」の3つのキーワードに着目しながら、学校現場で陥りがちな3つのシナリオを挙げている。すなわち、①「アクティブに(主体的)に

学ぶ」体育～「活動あって学習なし」の再現、②「アクティブに(能動的に)学ぶ」体育～「学習者の意欲喚起型の学習」の再現、③「アクティブに(協働的に)学ぶ」体育～「話し合い学習」の再現、といった問題点、および、一方で現存する「いまだ軍隊と工場の労働者としての身体イメージから成立する体育」の問題から、新しい身体イメージを存立基盤とする21世紀型の体育の学びを構想することの必要性を指摘している。これは小・中・高等学校の体育のみならず、大学において実施される模擬授業等のアクティブ・ラーニングにも共通する「陥りがちなシナリオ」ではないかとも考えられ、「一方向的な講義形式から能動的な学習への転換を図った際に『何』のために(何を目標に)学ばせようとしているのか」「活動がアクティブになることと思考がアクティブになることのどちらが重要なのか」「一部の科目がアクティブであれば他の科目は旧態依然のままよいのか」という大学教育の問題として考えるべきことと思われる。我々が「教育実習ⅠA(事前指導)」や「教科教育法Ⅱ」といった教員養成系科目について、今回行った模擬授業の導入をFDの視点で再考してみると、「生徒の管理方法・テクニック」に加えて、授業の構想力や授業研究・教材研究の能力といった「授業の中身・内容」にまで学生が「指導十分だった点」と感じさせられるようにするためには、模擬授業が学生たちにとって、単なる「準備してきたことの発表の場」や「教壇に立つ経験・場慣れの場」「教育実習のための予行演習の場」に終わらないよう、先に述べた「リフレクションさせるための時間の確保」や「リフレクション

のさせ方」「あるいはリフレクションシートの内容の工夫」などを我々授業運営側の教員がこれまで以上に考慮し、河野⁽¹⁹⁾が言うような「授業デザインにまで転換していくこと」や、あるいは「授業の構想力や授業研究・教材研究の能力」などを養成していくこと、そしてそのために、いかにして「学生の思考を深めること」ができるか、学生がリフレクションを行うための「観点の持たせ方」を再検討する必要があるものと考えられた。

一方で、「学生の思考を深めること」「授業の構想力や授業研究・教材研究の能力」「観点の持たせ方」は1つの授業のみで教えられるわけではなく、他の授業での学びとの兼ね合いも大きい。我々のカリキュラムでは「体育科教育法Ⅰ」「保健科教育法Ⅰ」において基礎理論や観点、問題意識などを学修させた後、「体育科教育法Ⅱ」「保健科教育法Ⅱ」において模擬授業を実施させるという流れになっている。よって、今回取りあげた問題点は、模擬授業を実施する「体育科教育法Ⅱ」「保健科教育法Ⅱ」だけの問題ではなく、その前段階の「体育科教育法Ⅰ」「保健科教育法Ⅰ」において、いかにして学生の思考を深めたり観点を持たせたりできるかということや、他教科、特にスポーツ実技系科目においては「指導法実習」（本学ではスポーツ実技系科目は「基礎実習」を履修したのち、「指導法実習」を受講できる）との連携も重要になってくるであろう。今回の結果を受けて、学科内でも、教育内容やカリキュラム改善のための議論を進めている。具体的には「単元〇〇についての指導案の書き方」「スポーツ種目〇〇の指導の仕方」といったような

学生の全ての要望に対して全ての用意をすることで応えるのは不可能であることから、学生の「授業の中身・内容」に対して『「How toを真似る」から「How toを自身で構築する』への転換を進めようとしている。「how-to(どのように)」は、「what(何を)」と「why(なぜ)」によって導き出されるものであることから⁽²³⁾、「How toを自身で構築する」ための能力を学生に身に付けさせるためには、我々大学教員が「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」という原点に立ち戻る必要がある。そしてそのことが、学生に対し、「反省的实践家」としての教師の専門性⁽²⁴⁾の構築へと繋がっていくのではないかと思われる。今、FDとして学科で進めようとしている『教育実習までに「どのような」能力を「どこまで」身に付けさせておくべきか』ということを、教育実習後、そして教職実践演習を履修した後の「卒業時の姿（卒業時に教員免許状取得者として身につけている能力）」について、学生の学びの実態と照らし合わせつつ、他教科とも連携しながらカリキュラムや授業内容を更に省察・検討し続けていくことが重要だと考えられた。

謝辞

本研究の調査にご協力いただいた本学科の学生および、学部FD推進事業研修会・協議会にてご協力やアドバイスをいただきました人間開発学部の先生方および、ゲスト講師としてご講演いただきました他大学の先生方に感謝申し上げます。

なお、本研究は平成26年度および平成27年度國學院大學学部FD推進事業の助成を受けて実施したものである。ここに記して感謝の意を表す。

注

(1) 文部科学省 <http://www.mext.go.jp/b>

- _menu/shingi/chukyo/chukyo 0 /toushin/
attach/1337016.htm (2016/11/1 アクセス)
- (2) 結城孝治 (2016) 「保育実習指導における学びの質と実習後の評価及び保育者効力感との関係」『國學院大學人間開発学研究』7, 87-107
- (3) 川喜田二郎 (1967) 『発想法 - 創造性開発のために -』中央公論社
- (4) 岸本肇 (1995) 「マイクロティーチングによる体育授業の体験学習の効果に関する研究」『神戸大学発達科学部研究紀要』2, 195-202
- (5) 糟谷英勝 (2006) 「教科専門科目と教育実習を往還する教科教育カリキュラムの工夫 - 「体育科指導法演習」を事例として -」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』』7, 91-100
- (6) 福ヶ迫善彦, 坂田利弘 (2007) 「授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法的検討」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』32, 33-42
- (7) 木原成一郎, 村井潤, 坂田行平, 松田泰定 (2007) 「教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域』56, 85-91
- (8) 木原成一郎, 日野克博, 米村耕平, 徳永隆治, 松田恵示, 岩田昌太郎 (2008) 「教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究 - テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素 -」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域』57, 69-76
- (9) 藤田育郎, 岡出美則, 長谷川悦示, 三木ひろみ (2011) 「教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討 - 授業の「省察」に着目して -」『体育科教育学研究』27, 19-30
- (10) 岸一弘 (2013) 「小学校教員養成課程の体育科目における模擬授業の検討 - 受講生の「授業省察力」の変容に関して -」『共愛学園前橋国際大学論集』13, 39-49
- (11) 宮坂雄悟, 中川麻衣子 (2015) 「教員養成段階における保健体育科「保健分野」の授業力の形成に関する一考察 - 授業観察における視点の変化に着目して -」『川崎医療福祉学会誌』25, 159-164
- (12) 宮尾夏姫, 三木ひろみ, 柴田俊和 (2015) 「体育科模擬授業における学習成果 - 授業・授業づくりの要点の理解と学習を促す授業体験の事例的検討 -」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』12, 93-104
- (13) 中西裕 (2013) 「ピアレビューを活用した授業レポートの「二回提出」方式の効果 - アクティブラーニングの試みとして -」『就実論叢』43, 247-261
- (14) 中山郁 (2015) 「導入教育とアクティブラーニング - 「教える」から「主体的・能動的学習者」の育成へ -」『國學院大學教育開発推進機構紀要』6, 27-45
- (15) 和井田節子, 小泉晋一, 田中卓也 (2016) 「教員養成課程におけるディベート学習の教育的効果 - 思考力と社会的能力に着目して -」『共栄大学研究論集』14, 193-216
- (16) 岩崎千晶 (2016) 「高等教育におけるアクティブ・ラーニングの導入と授業設計」『関西大学高等教育研究』7, 39-48
- (17) 積田淳史 (2016) 「大人数授業におけるアクティブラーニングの試み」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』6, 21-38
- (18) 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/05/11/1320901_11.pdf (2016/11/1 アクセス)
- (19) 河野麻沙美 (2016) 「教員養成課程におけるアクティブラーニングの課題と展望 - 21世紀型の学びを創出する教師の育成に向けて -」『上越教育大学研究紀要』35, 43-55
- (20) 岡野昇 (2015) 「アクティブ・ラーニングは体育の学びをどう変えようとしているのか」『体育科教育』7, 16-19
- (21) 鈴木秀人 (2015) 「教育現場に見られる矛盾」『体育科教育』7, 24-25
- (22) 溝上真一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- (23) 岡野昇, 佐藤学 (2015) 『体育における「学びの共同体」の実践と探究』大修館書店
- (24) ドナルド・ショーン (佐藤学, 秋田喜代美訳) (2001) 『専門家の知恵 - 反省的実践家は行為しながら考える -』ゆみる出版

The Effects of Applying Students' Trial Lessons to the Teacher Certification Program of Health and Physical Education

KAWATA Yuki, ITO Hideyuki, MURAKAMI Keishi

Abstract : The purpose of this study was to examine the effects of trial lessons of students in the teacher certification program of Health and Physical Education. We carried out a survey on the adequacy and deficiency of university classes to the student groups with and without teaching practicum experiences. Before applying the trial lessons to the course, the most of the students answered that what was insufficient in the course was 'instruction about teaching'. On the other hand, after carrying out the trial lessons, they answered that 'content of the course' was the least adequate, while, they responded that 'methods and techniques of student management' were taught the most sufficiently. These results suggest that although the application of trial lessons to the teacher certification course was effective in managing and controlling students, it was not enough for the students to improve their skills of planning, organizing, and reflecting the lessons and developing teaching materials. As much previous research shows, it seems important for us to consider the ways to cultivate students' abilities and help them think more deeply, taking their learning attitude into account and collaborating with experts of different subject areas.

Keywords : Trial lesson ; Faculty development ; Teacher training course ; Demands of students ; Reflection